

「岩、光る地」

野添の歴史

本年度は、地域の歴史をみつめるとの趣旨で、特別展「岩、光る地―野添の歴史」を開催する運びになりました。

野添の地域はかつて「岩光」といわれ、弘法大師とも縁のある地です。さらに、野添の歴史は、今から2万年前の旧石器時代から読みとることが出来ます。この歴史を6セクションにわけて、わかりやすく、紹介するとともに、「野添ふるさと館」のご協力を得て、なつかしい品物も展示します。

- ▼特別展開催期間 **10月3日(土)～11月23日(祝)**
- ▼開館時間 午前9時30分～午後5時
- ▼月曜休館 (月曜が祝日の場合は翌平日)
- ▼場所 郷土資料館
- ▼入場 無料
- ▼主催 播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館
- ▼協力 野添ふるさと館

I 古代の野添

野添の歴史は古く、野添地区の近隣から、2万年前の旧石器が発見されています。それは今より寒く瀬戸内海は陸地だった当時、野添に、獣が行き来する道があり、そこで待ちかまえて、狩りをしていたと考えられています。

さらに、1万2千年前になると、気候が変わり、今より暖かく、弓矢で狩りをするようになります。

ここに、野添住吉神社近くから出てきたという「石鏃」

を紹介します。

この石鏃は、畑を耕していたとき、たまたま見つけたそうです。このように、古代の人々の足跡が意外なところで、見つかることがあります。

また、少し時代は新しくなり、今から1500年前のものですが、兵庫県指定文化財「愛宕塚古墳」があります。

この古墳は当時、この地域を治めていた人のお墓です。当時、ここから瀬戸内海が見えていましたので、この地域とともに、海をも治めていたと考えられます。



▲中世の繁栄と、「岩光」の地名を残す「釈迦十六善神像」(町指定文化財)



▼野添で採取された石鏃



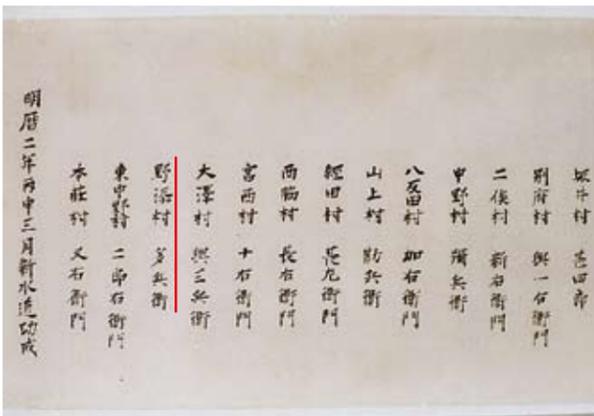
▲この地の豪族が眠る愛宕塚古墳(県指定文化財)

II 中世の野添

中世の野添を語るべきの大切な資料のひとつに、圓満寺が所蔵されている「釈迦十六善神像」があります。

この像の裏には、1395年に書かれた起請文があります。「岩光 一子 今里」の地域がまとまって祀っていたことがわかります。

さらに、1487年には、無量寿院のいわれを綴った版木ができます。当時、無量寿院が大切な役割をしていたことがわかります。



▲感謝にあふれた「播州賀古新疏水道記」(町指定文化財)の中に「野添村」の名も

III 近世の野添

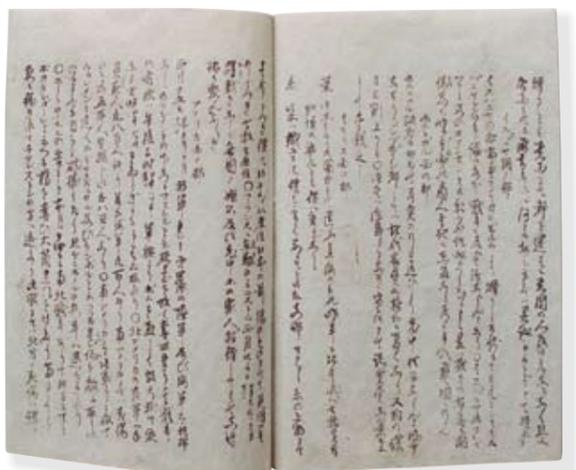
近世において、播磨町を豊かにしたものに新井があります。野添の地へも大中から逆サイホンで、喜瀬川をくぐり、水がやってきています。そして、田中地区へと向かっています。この新井をつくるにあたり、野添村の庄屋多兵衛氏が尽力したことが新井関係文書「播州賀古新疏水道記」からわかります。

この文書は、新井をいかに苦勞してつくったかを述べたものです。平均傾斜が20

00分の1という、今でも困難な工事を緻密な設計によって乗り越えた姿が浮かび上がります。それを支えた一人として、このように「野添村多兵衛」との名があります。

また、近世の人々の姿を描いたものに「御月見日記」があります。

この日記は、川端地区の人が、毎年の正月15日(旧暦で満月の日)月の入りの方で占うとともに、当時のようすを書き留めています。それは、170年以上も記録され、貴重な記録となっています。



▲「御月見日記」(町指定文化財)からは当時の日常の思いが伝わってきます

IV 近・現代の野添

明治時代になると、野添も大きく変わります。まず廃仏毀釈によって寺院の数が少なくなり、無量寿院が中心となっていくます。そのため、中世にできた「海光寺」はなくなり、今では跡地となっています。

1888年に土山駅ができ、人の流れも変わり、道も新しくできていきます。新しい文化が入ってきて地域の人の生活も大きく変わっていきます。このようすは、「野添ふるさと館」のご協力を得て、懐かしい品物をお借りいたします。



▲かつての栄光をかたる海光寺跡

このほか、「V野添の歴史点景・文化財マップ」「VI思い出の風景」なども紹介します。ぜひ、ご観覧ください。

●記念講演
「つづれ目池と播磨町」

- ▼日時 11月22日(日) 午後1時30分～3時
- ▼場所 播磨町郷土資料館
- ▼講師 兼本雄三氏(地域史研究家)
- ▼参加料 無料
- ▼問い合わせ 郷土資料館
- ☎078(945)5000